

『国後島の人びと』

高井 晋

2月7日は「北方領土の日」である。これは日本とロシアとの間で国境を確認した「日魯通好条約」が調印されたのが1855年2月7日であったことに由来している。

1981年1月6日、政府は閣議了解で2月7日を「北方領土の日」とすることを決定した。北方領土返還要求運動について、隣接する北海道・根室地域だけの問題とすることなく、全国的な盛り上がりにすることを考えたためである。これ以降、この日を中心に全国各地で講演会やパネル展、返還実現のための署名活動などさまざまな活動が行われ、東京では「北方領土返還要求全国大会」が毎年開催されている。今年は、安倍首相も出席して国立劇場大劇場で挙行の予定である。

笹川平和財団海洋政策研究所島嶼資料センターは、北方領土、尖閣諸島、竹島といった島嶼の法的地位について国際法の観点から研究し発信を行うという独自の活動を行っているが、北方四島交流北海道推進委員会ならびに独立行政法人北方領土問題対策協会が実施している「北方四島交流事業」により、筆者は、2016年には択捉島、2017年8月末には国後島を訪問する機会を得た。

同交流事業は、日ロ間の合意に基づいて、領土問題解決を含む日ロ間の平和条約締結問題が解決されるまでの間、相互理解の増進を図るための環境整備の一環として行われている政府の取り組みの一つである。これは、一般に「ビザなし渡航」と言われるもので、北方四島を訪問するにあたってパスポートやビザを所持する必要はない。

北方四島は、ロシアが違法に占拠している我が国の領土である。そのため、日本政府は日本人に対し、パスポートを持って北方四島を訪問しないよう要請してきた。パスポートを所持して北方四島を訪問することは、ロシアの領有権と認める結果になるからである。しかし、第2次世界大戦後に北方領土から強制的に退去させられた旧島民の墓参などの要請に鑑み、日ロ両政府が人道的配慮のために始めたのが、この「ビザなし渡航」である。北方四島訪問団は、北方領土元居住者、北方領土返還要求運動関係者、専門家、政府関係者、報道関係者などで編成される。

昨年8月24日、滞在していたロンドンから帰国した翌日、筆者は根室へ飛んだ。「平成29年度第3回北方四島交流訪問事業（後継者）」訪問団の「結団式・研修会」に出席するためである。結団式は、例年、根室市の「二・ホ・ロ館（日ロ交流会館）」で行われる。

今回の訪問団員は、高校生、大学生、国会や地方議会の議員、教員、専門家、外務省職

員、通訳、事務局職員等総勢 45 名であり、筆者は、結団式後の研修会で「日本の島嶼領土と国際法」を講演した。翌 8 月 25 日の早朝（9 時 30 分）、根室港琴平川岸壁に係留されていた北方四島交流船「えとぴりか」に乗り込んだ訪問団は、同日 13 時ごろに国後島古釜布沖に到着し、船上で入域手続きを行った。その後、15 時 30 分には迎えに来た舩（はしけ）で上陸し、国後島の中心集落である古釜布（露名：ユジノクリリスク）に日本が建設した緊急避難所兼宿泊施設である「友好の家」で荷解きをした。前年に訪問した択捉島と違って、国後島からは根室の知床半島が目と鼻の先ほどの近さに見えた。2016 年秋に択捉島へ渡航する機会を得たときは、今回と同じく古釜布港沖で入域審査を行ったが、択捉島の紗那港に到着したのは翌日のことだった。択捉島はそれだけ大きな島なのである。このときはこの紗那港までの時間を利用して、筆者在船内で「北方領土問題と国際法」を講演した。



古釜布港と市街地（筆者撮影）

今回の国後島訪問では、「友好の家」に宿泊し、8 月 26 日、27 日と、地区図書館、中学校、郷土博物館、日本人墓地、消防署、スポーツ健康施設等を訪問し、国後島住民と市街地を散策し、日ロ間の経済交流を踏まえての住民との意見交換会などがあり、住民と懇談する機会が多くあったのは幸いであった。振り返ってみると、「教育者交流」訪問団の一員として参加した択捉島訪問の際は、舩で上陸した後は、協力住民の車に分乗して小・中学校で授業参観、学生間交流と教育者交流を行い、また、日本人墓地の墓参、ロシア人住民の家庭訪問などの交流を行ったが、宿泊は船内に限られていた。

国後島の人々は、択捉島の人々と比較すると概して表情が明るかったが、老人が極端に少ないのが印象的であった。冬の国後島は極寒で医療施設も不十分なため、島民は60歳を超えると国後島から離れてサハリンへ転居する、というのがその理由だった。また、国後島には択捉島と同じく高等学校がないため、中学校の卒業生の多くは樺太島のユジノサハリンスクの高校へ進学し、国後島に帰っても仕事がないため、そのまま定住することが多いとのことだ。

第2次世界大戦前、国後島には約7,000人の日本人が居住していた。60年経過した現在、居住しているロシア人は約6,500人であり人口は減少の傾向にある。2年前に、ロシアのメドベージェフ首相が、北方四島の人口倍增計画を発表し、数々の優遇策をとっているが、その効果は明らかになっていない。国後島の人々の共通した意見は、国後島の自然はとても美しいので、北方四島における日ロ共同経済活動にあたっては、自然を破壊しないよう期待しているということであった。

北方四島交流事業に協力する国後島の人々は、優先的に北海道など日本へ渡航できることになっていて、既に4回も渡航した人もいた。これらの人々は、概して日本人に対して好意的であり、日本文化に対して好奇心が旺盛であったのは、交流事業の成果と言えよう。しかし、それ以外の人々は概して表情が暗く、訪問団員に対してよそよそしい態度を示していた。訪問団員は、国後島と択捉島の住民と領土問題を話すことを禁じられていたが、それ以前に、会話をしようという雰囲気がまったくなかった。

国後島訪問中、地域住民との交流の場で、美しい金髪の少女が、訪問団員に一生懸命日本語で話しかけ、折り紙や絵を配っていた。一緒に来ていた父親は、少女は難病にかかっている日本の病院で治療を受けたいと切望しているようで、なんとか少女を訪日させられないかと訴えていたが、実現は難しいという。

ホームビジット先の少女たち（筆者作成）



北方四島に住所をもっているロシア人が訪日できるのは、北方四島交流事業の日本訪問団員としてだけである。少女と父親の住所は国後島であるため、たとえ私費であっても日本へ入国することができないという厳しい現実がそこにあった。

(笹川平和財団海洋政策研究所ブログ 海のジグソーピース No. 65 2018年02月01日(木)掲載)